

「へ、へー」

一方でライナーは早くもいつもの鎧よろいを手にしていた。

「止めても……聞かないよね」

眉まゆをひそめるミシャにライナーはにっこり笑いかける。

「すまない。でも、行かなくちゃ」

「わかっているわ。ライナーって昔からそういうひとだもの」

少し寂しそうに少女は微笑ほほえんで、鎧よろいを身につけるのを手伝い始めた。

032

かつてファルス司祭の陰謀で、ミシャは誘拐され、天覇に長く幽閉おぼへいされていた。世界の守護者として謳うたうミシャの身柄をおさえることで、塔を破壊はめつへと導こうとしたのだ。

最終的にライナーたちの活躍でその陰謀はくじかれ、ミシャも自由の身になりはした。だが被害がなかったわけではない。いまに至るまでの間、多くの悲劇が生まれた。そのひとつがスクワート村だ。

直接ファルスが手を下したわけではないにせよ、スクワート村はその陰謀の過程で戦場となり灰燼かいじんに帰したのである。

宿屋を出て、スクワート村にたどり着いたライナーたちは絶句した。

あちこちから炎があがり、銃声や、あきらかに詩魔法とおぼしき閃光せんこうが走っている。見えている範囲だけでも何人もの男女が倒れていて動かない。もう死んでしまっているのだろうか。ライナーは齒はきしりした。

「また、オリカの故郷を焼き払うつもりなのか……！」
スクワート村はオリカの生まれた場所だった。

村を廃墟にした戦いで、彼女はここを去ることになり、数奇すうきな運命をたどってライナーとともに旅することになったのだ。しかし、彼女の心がいまでもここに あることをライナーは知っている。

その村が、いま再び戦いの炎に包まれていた。

「ジャック、ミシャ、シユレリア様！」

ライナーは叫んで手挟たばさんできた大剣を振りかざす。

「援護えんごを頼む！ 一気に畳み込んで、戦いをやめさせる！」

「突撃するなら俺もだ！」

槍やりを構えたラードルフが突進してくる。

「ラードルフ！ なぜここに」

「こんな無益な争い、俺が放っておくと思うのか？ 話はあとだ、さあ行くぞ！」

ライナーがおうと答えて再び剣を構えようとしたところで、シュレリアが叫んだ。

「ちよつと待って！ なにか変です！ 詩が……！」

シュレリアは両手を顔に当てて息を呑んだ。

「なんなのこれは！ 詩が異常に増幅されています！ いったい誰が……」

悲鳴が聞こえた。とライナーは思った。

しかし声のする方を振り向いて、それが悲鳴ではないとすぐわかった。詩魔法の光が、村のあちこちからまるで光の柱のように空に向かって伸びていた。

「これは、普通の詩魔法とは違うぞ、ライナー！」

ラードルフが叫ぶ。

「いったいどうなるっていうんです、シュレリア様！」

「詩が……実体化します！ 気をつけて、みんな！」

シュレリアの叫びの中、村のあちこちから伸びていた光の柱の中に、不気味な姿が浮かび上がってきた。

ねじ曲がった角をもったシルエット……。

「あれは、ミュール？」

「いいえ、でも……！」

光の中から現れた怪物は、世界を滅ぼそうとしたレーヴァテイル、ミュールの姿によく似て

いた。正確に言えば、本来あどけない少女の姿であるミュールの怨念が実体化した姿に怪物はよく似ていた。

だが、よく見れば別のものだということは、実際にミュールと刃を交えた者であればすぐにわかる。角の形も、手足の付き方も、彼らが見たミュールとは明らかに異なっている。

（だけど、一瞬よく似て見えた……）

ライナーは剣の柄を握りしめつつそう思う。

いきなり現れた怪物に、天覇の部隊、レーヴァテイルたち双方ともに面食らっている様子だった。

とくに、レーヴァテイルたちはひどく驚いている様子で、宙に浮かんであたりを睥睨する怪物が、決して彼女たちの意志で呼び出したものではないのだということがわかる。

銃声が出て、怪物の一匹の角に火花が散った。それまで獲物を見定めるかのようにして、宙に浮かんだままだった怪物は、その攻撃を合図に一気に急降下した。

「いかん！」

ラードルフが飛び出した。それにライナーが続く。

地上に降下した怪物は両腕で天覇の警備兵をはねとばした。大きさを三倍は違う怪物の臂力に、警備兵は悲鳴をあげるまもなく廃墟に叩きつけられた。

怪物が、恐怖に動けないでいる次の警備兵に襲いかかろうとするところにラードルフが躍り

込む。

「神罰の槍！」

一瞬の間に繰り出された無数の突きが、怪物の角と言わず腕と言わず命中する。硬い殻のような皮膚に阻まれてほとんどダメージは与えられなかったようだが、それでも怪物の注意はロードルフの方に向いた。

怪物が新たに現れた敵に向かって咆吼する。

「私が相手になってやる！ ライナー、レーヴァテイルたちの方を！」

ロードルフの声にライナーはそのまま走る方向を変えて別の怪物へと向かう。

目指した怪物は数人がひとかたまりになっているレーヴァテイルに襲いかかるうとしていた。本来か弱く、戦うものとしてはあまりに脆弱な彼女たちは、怪物が指先を一振りするだけでもただではすまないだろう。すっかり自失して身動きが取れないなかでひとり、必死に詩を紡ぐうとしている健気な者もいたが、目前に迫った危機にまともに謳うことができないでいる。

「俺が相手だ！」

間一髪のところまで滑り込んだライナーは切っ先で怪物の腕を切り払った。がんと岩でも切ったかのような衝撃が伝わって、怪物の腕が大きく上に弾かれる。

自分の行為を中断させられた怪物が、剣呑な叫びをあげた。

ライナーは背後の少女たちに声をかける。

「建物の陰へ！ こいつは俺が引き受けた」

そのまま背後を確かめもせず怪物に斬りかかる。

「でやあ——っ！」

裂帛の気合いとともに振り下ろされた一撃は、さすがに硬い怪物の皮膚をもざっくりと斬り裂いた。

警備兵の銃撃でも傷ひとつつかない怪物だったが、鍛え抜かれたライナーの一撃は、なまじの銃など及びもつかない威力を持っているのだ。

傷つけられた痛みで逆上した怪物は、恐ろしい叫びをあげながら、両腕を振り回してライナーに突進してきた。まともに当たれば家でも吹き飛びそうな、仮に剣で受けたとしてもただでは済みそうもない勢いだ。

しかしライナーは一步も引かずに怪物の突進を待ちかまえる。

「来いっ！」

剣呑な暴風と化した怪物の両腕が迫る。あわや、というところで、しかしライナーの姿が怪物の視界から消失した。

怪物が反応しきれないだろう、ぎりぎりのところでライナーは上に跳んだのだ。翼でもあるのかと思うほどの高さまで跳躍して、ライナーは落下の勢いをも使って一気に剣を突き降ろした。

怪物の後頭部に剣先が深々と突き刺さる。

恐ろしい絶叫が怪物の口から迸り、そのままもんどり打って地面に倒れ込んだ。巨大な質量の衝突で大地は激しく振動し、もろくなった廃墟の壁ががらりと崩れ落ちた。

「ライナー、避けてね！」

詩と重なって喋るとき特有の微妙なビブラートのかかった声が聞こえた。ミシヤだ。

ライナーが剣を引き抜き、まきぎま怪物の身体から飛び退くと、槍状の炎が怪物の身体を灼いた。さすがに強力な詩魔法によって紡がれた炎は、瞬時に怪物の身体を消滅させてしまう。

怪物の無力化を確かめつつ、ライナーが視線を巡らすと、ラードルフも警備兵たちの援護を得て、怪物を倒したところだった。また別の一角では、レーヴァテイルたちをかばってジャックが左腕の銃を乱射している。背後ではシユレリアが詩魔法の輝きをまとっていた。こちらも程なく決着がつきそうだ。

ライナーはうなずいて新たな敵を探しする。すぐに空中高く舞い上がっては、再び降下を繰り返している三匹の怪物を見つけることができた。どうやらあれで全部らしい。

「ミシヤ、援護頼む！」

答えも確かめず、再び怪物たちに向かって突進していった。

「あ、ちょっと待って……！」

ミシヤが慌てて追いかけようとするのも構わない。もはや彼の目には怪物の姿しか見えてい



ないのだ。いや、正確に言うのなら怪物に襲われている人々の姿、というべきだろう。

「あとから追いかけるミシヤなどは、ライナーのそんな性格をよく知っている。」

困っている者を放つてはおけないのだ。そのためには自分の危険など少しも顧みない。

「きつと、腕の怪我のことなんかすつかり忘れちゃってるんだわ」

ミシヤとしてはため息でもつきたいところだ。助けようとしている相手が、人間と戦っていたレーヴァテイルであることなどお構いなしなのである。後ろから刺されることなど想像さえしていないのだ。

新たな敵の出現に、怪物たちは協力して対することに決めたようだ。三匹の怪物がいつせいにライナーの方に向きを変える。

「まずい！」

ミシヤはその場で足を止めて謳い出した。強力な魔法を紡いでいる暇はなさそうだが、相手の出鼻をくじかなければ、さすがのライナーも三匹いっぺんでは危険だ。

ミシヤの唇から、涼やかな歌声があふれ出す。そしてその旋律は彼女の周囲の空間からエネルギーを引き出していく。彼女の詩に世界が共鳴している。

エネルギーはすぐに肉眼でも見えるほどに集まって、光の粒子となり、それがミシヤの詩にのってさらに集まり、光球と変じていく。

「このへんが限界……！」

ミシヤの実力なら、いくらでも光を大きく集めることもできるが、それをしている時間はなかった。

光球はまだ鞠程度の大きさしかなかったが、ミシヤはそれを解放した。

詩によってベクトルを与えられたエネルギーは、一直線に先頭を滑空する怪物の鼻先に突進する。

ぶつかった光はまぶしい火花を発したが、怪物は一瞬動きを止めたに過ぎない。銃弾も効かない怪物であれば当然のことだ。

だが、攻撃のタイミングを見計らうライナーにとつては、その一瞬が重要だった。

ものも言わずに怪物の間に飛び込んで、喉を斬り払う。そして怪物の身体を遮蔽物にして、死角から別の怪物に躍りかかっていく。

「いけえっ、ライナー！」

応援しながら、ミシヤは次の詩を紡ぎ始めていた。次の魔法で彼の援護を続けなくてはいけない。けれど、どうしてだろう。

ミシヤは謳いながらふと思った。

あの怪物が自分の詩魔法同様、レーヴァテイルの詩によって紡がれたものなら、なぜ生みの親である彼女たちにさえ襲いかかるのだろうか。

しかしあまり考え込んではいられない。いつもよりライナーの動きが鈍いようだ。腕の怪我が影響しているのだろう。

ミシャは謳うことに集中した。

「お、ライナー、手こずってるようだな」

ジャックは分解していく怪物を確認しつつ、ライナーの戦いぶりにコメントした。

「援護に回しましょう。彼は怪我していますし」

「了解だ。だれも俺のことは心配してくれなくても了解だ。シユレリア様」

「あ、あら。私はみんなのことを心配していますよ」

戸惑った様子の装甲服がジャックに言う。言われた方は肩をすくめた。

「はいはい、そういうことにおきましようかね。で、ラードルフはどこいったんだ？ 相

手にしてたのもう片づいたんだろうに」

駆けだしながら、急に姿の見えなくなった司祭を探したが、ジャックの視界には彼の姿は見

えなかった。

033

そのとき、ラードルフはひどい衝撃を受けていた。

「フェイマ、なぜ君がここに……！」

呆然と立ちつくす彼の前に、しばらく前には確かに教会にいたはずのレーヴァテイルの姿があった。

ラードルフが驚いているのと同様、フェイマの方でも驚いてはいるらしかった。

「ラードルフ様、なぜここに……！」

フェイマの口調には、ラードルフがこの場にいることにただ驚いているというよりは、彼がここに來ていることを糾弾するかのような響きがあった。

「なぜって、それは……！」

言いかけてラードルフは口ごもった。考えてみれば、教会を飛び出してきたのはいいものの、それらしい正当な理由があつてのことではない。

争乱の報に、矢も楯もたまらずに飛び出して来てしまっただけなのだ。司祭として面目の立つ理由など、まるで用意してはいなかった。

彼が答えに窮しているわずかのあいだに、その背後から天覇の警備兵が忍び寄っていた。

「死ねっ、レーヴァテイル！」

警備兵の銃が火を噴く。

しかし銃撃はラードルフがろうじて身を挺して受け止めた。
「なにをする！」

完全装備の鎧を身につけていたおかげでたいしたダメージは受けなかったが、これがレーヴァテイルであれば無事では済まないところだ。怒るラードルフに、警備兵が怒鳴り返す。

「なんで、レーヴァテイルをかばう！ こいつらは人間を襲うんだぞ！」

「ばかな！ レーヴァテイルが人間を襲うなど……！」

言い返そうとするラードルフの背後から、詩声が聞こえた。

「フェイマ！」

振り返ったラードルフのすぐ背後で、フェイマが謳っている。その口から、かすれた言葉。

「人間なんて……、みんないなくなってしまう！」

「やめろ、フェイマ……！」

詩を中断させようと近寄ろうとしたとき、詩の音が急に変化した。フェイマの表情が強ばり、ついで恐怖に青白くなる。

「なにこれ、私こんなの謳っていない……！」

フェイマは口を手で覆おうとしたが、その動作は緩慢で、自分で自分の身体をうまく動かせないように見えた。その間にも、詩は急速にエネルギーを集めていく。

「こんな速度で……、これではシユレリア様並の……！」

ラードルフが驚愕に呻くその前で、詩魔法の光は急速に実体化していく。

光の中に現れた黒い染みがみるみる形をとつていき、そして凶悪な咆吼をあげた。

あの怪物だ。

「やめて、だめ……っ！ 私こんなの謳っていない！」

フェイマが悲鳴をあげたが、怪物はもはや自分を紡いだその当人の言うことなど聞いてはいなかった。

さらに一声吠えて、目の前にいたラードルフに襲いかかる。丸太のような腕の一撃を槍で受け止めつつ、ラードルフは叫んだ。

「逃げろ、フェイマ！ こいつはどこかおかしい！」

蒼白な顔で表情を強ばらせながらも、フェイマはよろよろとその場から距離をとる。

ラードルフは槍の切っ先で怪物の行動を牽制しつつ、攻撃のタイミングをはかった。

「こいつ、確かに詩魔法で紡がれていた。だが、謳い手当人の制御が利かないとは……！」

怪物が飛びかかってくる。

ラードルフは身軽に飛び退いて、凶悪な一撃をやり過ごした。

「とにかくこれ以上謳うのをやめてもらわないと、大変なことになるぞ！」

「いくらでも現れるのか、この怪物は！」
ライナーの額を汗が流れる。

さきほどの三体を倒したあとも、怪物はさらに現れて、目につくものを手当たり次第に攻撃していた。

いま一体を剣でしとめたところだったが、さすがに疲労の色が表れてきている。怪我の影響が出ているのだ。

「ライナー、これじゃきりがいいわよ」

駆け寄ってきたミシヤの顔にもだぶ疲れが見えてきている。

「しかし、ここで逃げ出すわけにもいかない」

「それはそうだけど……、このままじゃ……」

ミシヤの視線が、ライナーの左肩に注がれる。

「いったん作戦を立て直したら……」

そう言いかけたとき、怪物の咆吼と悲鳴が重なって聞こえた。

「あっちだ！」

駆けだすライナーのあとを、ミシヤが心配げに付き従う。

いまでは廢墟とはいえず、もとは建物が建ち並んだ場所だ。視界を遮るものは多く、ライナー

たちは瓦礫を飛び越え、古びた家を回り道して悲鳴のした場所を探さなければならなかった。ふたりがその場に辿り着いたときには、そこは悲惨な有様になっていた。ミシヤが悲鳴を呑み込む。

怪物の足下に、ぐったりしたレーヴァテイルが、ひとり、ふたり。そして怪物の鋭い牙の生えた口にくわえられたレーヴァテイルがもうひとりぶら下げられている。悲鳴をあげてもがいているが、か弱い少女の力では、そのあざとから逃げ出すことなど不可能だ。

「おのれっ！」

ライナーが飛び出す。

剣を振るって攻撃するが、レーヴァテイルの身体を盾にされた格好で、思うように仕掛けられない。

怪物は嘲笑うかのように、低空をゆらゆらと飛行している。
「くそっ、いったいどうしたら……」

少しでも隙を作れば、勝機があるかもしれない。だが、ミシヤの詩魔法が完了するだけの時間、怪物につかまったレーヴァテイルが無事であるかどうかわからない。

勢いに任せて斬りつけるしかないか、とライナーが腰をかがめたとき、横合いから怪物に槍を構えた数人の影が襲いかかった。威勢良く飛び出してきたその攻撃は、しかしあっさりとかわされてしまった。攻撃の主が無様に地面に転がる。

だがその攻撃が一瞬の間を作った。怪物の注意がそちらに向いたその瞬間に、ライナーは疾風のように飛びだして、上段から大剣を振り下ろした。

「や——っ！」

根元から牙が断ち折られ、レーヴァテイルが地面に落下する。

目の隅でミシヤが駆け寄るのを確かめつつ、ライナーは次の一撃を怪物目がけて繰り出した。牙を折られてひるんだか、怪物は手をむやみやたらと振り回してライナーから身体を遠ざけようとした。その無防備な背中に、先ほどの人物が再び襲いかかる。

鋭い槍が、怪物に食い込んだ。

そこで初めて、ライナーは戦いに加わってきたのが、ラードルフとよく似た格好をした人々だと気づいた。

「エル・エレミア教会の……神官？」

格好は似ていても、さすがにラードルフの実力には及ばないらしい神官たちは、怪物の反撃に何人かが弾き飛ばされてはいたが、少しもひるんでいない様子はない。かえって快活にライナーに声をかけてきた。

「ライナー殿ですな！　さすがに世界を救った英雄。いち早く駆けつけておられるとは！」

「あ、あなたたちは」

「我ら、ラードルフ様に従って、ひとびとを危機から救おうと立ち上がった者です」

「な、なるほど……」

なにやら詳しい事情はわからなかったが、とにかく貴重な援護であることに違いはない。

「そういうことならば……っ！」

周囲から攻撃されて、目標を定めかねている怪物に、必殺の一撃を叩き込む。

絶叫とともに、怪物が地面に倒れ込み、分解していく。

刃こぼれしていないか剣の様子を確かめつつ、ライナーは神官たちに話しかけた。

「ラードルフの仲間だっというなら、話は早い。とにかくこの怪物たちをやっつけて、戦いをやめさせなきゃ」

「はい。私たち以外にも、二〇人ばかりが駆けつけています。我らがラードルフ司祭やライナー殿には及びますが、お力になります」

035

フェイマは恐怖にかられて廃墟の間を走っていた。

ひきつったような悲鳴が止まらない。声を出すのはかえって危険だとわかっているのにおさえることができない。

廢墟の村は、入り組んだ路地が、くずれた建物のせいでまるで迷路のようだ。彼女は迷宮の中をよろめきながらさまよった。

いったいどうしてこんなことになってしまったのか。

敬愛するラードルフ司祭に對抗心剥き出しのモリスに、もっと互いに仲良くしてもらおうに話そうとしただけなのだ。

かたくなな彼の態度に、いつしか会話が言い争いになり、やがて自分でも思っていないかっただけの口をついて出た。

「人間なんていなくなってしまう方がいいのに」

怒りがとめどなく湧き上がり、婚約者に向かって罵倒の言葉を投げつけたのを覚えている。

いま思えば、そこまで言う必要があったとは思えない。

なにをおいても、自分にはいつも優しいモリスだということの。

瓦礫に塞がれた道避け、建物の中をくぐって歩く。

汗ばんだ身体は、ほこりがべつとりとはりついて気持ちが悪い。その場にへたり込んで、汗をぬぐって息を整えたかったが、禍々しい怪物の恐怖は、彼女の脚を勝手に動かし続ける。

教会の任務として、幾多の実戦を経験してきたはずの彼女が、しかしいまは恐怖かられている。ほこりにまみれ、汗みどろになりながら廢墟の間をネズミのように逃げ回っている。

「モリス……」

婚約者の名を我知らずつぶやいていた。

ふらついて手をついた壁がもろくも崩れ、フェイマは支えを失ってその場に転んでしまった。崩れた壁はいくつもの瓦礫になって、派手な土埃をまいあげる。それを避けようと顔をそむけたその視線の先に、通りを抜けてきたばかりの男がいた。

ごつい銃を構えた男の肩に、天覇のマーク。

「レ、レーヴァテイル……」

一瞬呆然としていた男は、次の瞬間、銃口をフェイマに向けた。

だが、男が引き金を引くより早く、大きな黒いものが風のように横切つて、男の姿を消し去った。

ずっと遠くの方で、柔らかな何かが硬いものにぶつかる嫌な音がした。

「……………」

横切った黒いものが、振り回された怪物の腕だったのだとフェイマが理解したのは、あざけりするような怪物の咆吼を聞いてからだだった。

宙を飛んでいた怪物は、地面に降り立つと、ゆっくりと彼女の方に近づいてくる。

その目に残忍な光が宿っている。

さっきの男と違って、彼女が武器をもっていないことを充分に理解しているのだ。邪悪ながら、この怪物には知能があるのだ。

「こんなの……私、知らない……」
立ち上がることもできず、ただ見上げるばかりのフェイマを前に、怪物はもう一度吠えた。
殺される……!

フェイマは思わず目をつぶった。自分の無惨な死が頭に浮かぶ。

だが、すぐにやってくるはずの苦痛は、なかなかやってこなかった。

「……………」

おそろおそろ目を開く。

と、そこにはものものしい鎧姿の男が彼女に背を向けて立っていた。

フェイマは見たことのない作りの鎧だ。手に反り身で細い刀身の剣を握っている。

その剣士の向こうで、怪物は縦にふたつに割られて、分解しながら左右に倒れていつていた。

「危ないところだったね」

剣士が彼女を振り向く。

美しい剣士がそこにいた。

声は確かに男のものらしいのに、その顔立ちにはレーヴァテイルでもここまでの美形はいるま

い、というほどに整っている。

フェイマは一瞬恐怖も忘れて、剣士の顔に見入ってしまった。

剣士は彼女の反応を気にする様子もなく、剣をさやに収めて言葉を続けた。

「しばらくの間は謳わないでいた方がいい。詩魔法……いやレーヴァテイル全体に異変が起きている」

フェイマはなにかば自失して剣士の言葉を聞いていたが、気づけば彼の姿は消えてしまっていた。まるで最初からその場にいなかったかのように。

彼女はしばらくその場に立ちつくした後、怪物に弾き飛ばされた男の担当に走り出した。

036

ライナーがうなずいたそのとき、急にあたりが暗くなった。

「なんだ……?」

見上げた空に魚に似た巨大なシルエット。

遠い地響きのような音を立てて回る動力円盤を後背部に備え付けた機械がスクワート村の上に滞空していた。

「飛空艇! いきなりこんな場所に乗りつけて……、いったいだれが」

彼の言葉に応えるように、飛空艇からアナウンスがあった。

「亜耶乃から天覇職員へ。直ちにレーヴァテイルへの攻撃を中止、怪物どもに攻撃を集中せよ。これは命令だ。敵は怪物どもだけだ」

「亜耶乃さん……」

天覇の社長がわざわざ飛空艇で乗りつけてきたのだ。大勢は決した。

怪物は何匹か残っていたが、さすがにレーヴァテイルたちも自分たちの詩魔法が怪物を生み出すことに気づいて、それ以上謳うことをやめていたし、教会から駆けつけた神官たち、そして亜耶乃の命令一下、組織だった行動を取り戻した天覇の警備兵たちが一丸となって攻撃に回ってしまえば、もはや怪物たちに勝ち目は無い。

やがて、怪物たちの掃討が終わると、飛空艇は高度を下げて着陸した。その周囲に、戦いを終えた警備兵たちが集まってくる。神官たちもラードルフのもとに集まりつつあった。

レーヴァテイルたちは、もはや謳うこともできずに、飛空艇を遠巻きに見ているばかりだ。その上甲板に亜耶乃が現れた。手にした小型マイクを通じて拡大された彼女の声があたりに響き渡る。

「無益な戦いは終わりだ。レーヴァテイルたちも安心して欲しい、これ以上我が社の社員も、ほかのだれも君たちを傷つけたりはしない。天覇の社長として約束する」

「あたしたちをクビにしたくせに！」

レーヴァテイルたちの中から叫び声。亜耶乃は固い調子でそれに答えた。

「それは誤解だ。我が社は君たちレーヴァテイルをクビにするつもりはなかったのだ。事態がここまで及んでは、いままら信用してもらおうのは難しいかもしれないが、できれば説明をする時間をもらいたい。そして、その間に負傷者は手当むすかを受けて欲しい」

037

「まさか君が来ているとはな」

ラードルフは神官のひとりに話しかけた。相手はうなずいたが、心ここにあらず、といった様子だ。

「気が変わったのか？」

そう問うラードルフにまたうなずきつつも、視線は周囲を目探ししている。その様子でなぜ彼がここにやってきたか、ラードルフは心づいた。

「フェイマなら無事なはずだ。さつき逃げるように声をかけたばかりだからな」

そこで初めて神官……モラリスはラードルフの方を見た。

「本当か？ フェイマはどこに」

日頃のかしこまった口調も、いまはすっかり影を潜めている。それだけ慌てているのだろう。「さて、たぶんそこらにいるはずだが……」

「たぶんでは困る！ フェイマ、フェイマ！」

モラリスは、大声をあげながらレーヴァテイルを探して歩き始めた。

「口ではどうこう言っているけど、婚約者が心配か……」

汗と埃にまみれたラードルフの顔に、思わず笑みが浮かぶ。

その視線の先で、どうやら神官は目指す相手を見つけたようだ。

力無く立ちつくす少女に、体当たりしそうな勢いで駆け寄ってそのまま抱きすくめる。

「フェイマ、フェイマ！ 無事でよかった……！」

「どうして……ここに……」

疲れ果てているのか、ややぼんやりした様子でフェイマがたずねる。モラリスはせつば詰まった口調で答えた。

「教会からお前がいなくなっているとわかって、もしかや、と思ったのだ。私は……私は……」
いいながらさらに力を込めて華奢な身体を抱きしめる。

「お前にもしものことがあつたら、と思うともう……」

さすがにそれ以上は言葉にならないようで、彼はひたすら少女の存在を確かめるように、フェイマの身体を何度も撫でた。

「あ……、痛い……です」

少女はそう小さな声で訴えながらも、自分の方からも腕を回して大柄な神官の身体を抱き返

すのだった。

周囲ではようやく亜耶乃の説得に耳を貸す気になったレーヴァテイルたちが、飛空艇の周辺に集まり始めている。

「ジャック、ここにいたの」

クルシエがまだ腕の銃を展開させたままのジャックに声をかけた。

「いたの、はないだろ。お前は亜耶乃社長と一緒に来たのか？」

「一緒に来いって言われてね。戦いになるのならボクも力にはなれるし」

肩から提げている巨大なチェーンソウを軽く叩いてみせる。技術系の人間でありながら、クルシエが戦いで得意としているのはこのチェーンソウを振り回した肉弾戦なのだ。

「俺はこういう戦いは願ひ下げだがな」

ジャックは周囲を見回した。クルシエも同意する。

「でも、いったいなんだってこんなことに」

「おまえさんところの社長が、レーヴァテイルをクビにしたから、彼女たちが怒ったんじゃないのか？」

「違うよ、そうじゃない」

クルシエは亜耶乃から聞いた話をそのまま聞かせた。ジャックは納得いかないようだった。

「けど、そりゃおかしんじゃないかねえか。新しい契約なんて、そんな話をちゃんと聞いてりゃ、別

に会社を飛び出してこんなところに立て籠こもる必要なんかはないはずだ」

「そうなんだよ、確かに警備部の連中、社長に知られる前になんとかしようなんて、先走ったことをしたからこんなひどい有様になってしまったけど、そもそも、レーヴァテイルたちがちゃんと話を最後まで聞いてくれれば……」

人事部で見た人間たちの冷淡さは確かにレーヴァテイルたちの心を傷つけたろうが、だからといって、話を最後まで聞いてもらえないほど彼女たちに忍耐力がなかったとは思えないのだ。「もともと、ボクのプロジェクトでいくつも仕事を任されるような頭のいい子たちも会社を飛び出してる。なにかおかしいよ、この話は」

「ああ。レーヴァテイルだれもがっつてのが気に入らない。ライナーの話じゃ、クレアさんまでなんだかおかしかつたらしいんだ」

「あのクレアさんも？ そりゃ確かに変だよ………そういうえば、そのライナーは？」

「向こうで戦ってたはずだ。飛空艇は見えてるはずだから、すぐにこっちへくると思うがな」ジャックは目探したが、ライナーの姿は見あたらなかった。

戦いが終わったライナーは、ミシャと神官たちに怪我人を任せて、ひとり廢墟の中を歩いていた。

「オリカもしかしたらここに……」

そう思ったのだ。

もともとこの村はオリカにとつて故郷でもある。多くのレーヴァテイルたちがこの村に集まっているのであれば、オリカがその中にもおかしくはなかった。

そして、スクワート村でオリカがいる場所といえは……。

屋根は落ち、壁も半壊して、もうひとが住める場所ではなくなった一軒の家の前にライナーはやってきた。かろうじて二階は崩壊から免まぬがれているが、それも、建物の悲惨な印象を増す役にしかな立っていない。

かつてオリカに案内された場所。オリカの生家。

「オリカ、オリカ」

ひどくきしむ床板を踏み抜いてしまわないように気をつけながら、ライナーは建物の中に入つていった。

「オリカ……」

名前を呼びながら建物の中を歩く。この家にひとが住まなくなつてからまだ二〇年と経っていない。だというのに、この家の中はもう百年もの月日が流れ去つてしまったかのようだ。人間が手をかけない建物のはかなさを思い知らされる。

同時に、このうち捨てられた場所に、ライナーは不安を感じずにはいられない。はつきり意識していたわけではないにせよ、オリカの心の裡が、いまだこの生家のように荒れ果ててい

アルトネリコ3 世界終焉の引鉄は少女の詩が弾く

完全新作アフターストーリー

2011年3月15日 上下巻 同時発売!!



下巻：384 ページ / 704 円 (税込)



上巻：336 ページ / 683 円 (税込)

作：富松元気 カバーイラスト・口絵：風良 挿絵：辻田裕子 (ガスト)

GA 文庫 (ソフトバンク クリエイトィブ株式会社)

(C)GUST CO.,LTD. (C)NBGI